

ちんどん文化と子ども

—ちんどん鈴乃家の事例より—

太田 梢 (近畿大学九州短期大学)

Chindon and Children-The Case Study of Chindon Suzunoya
Kozue Ohta (Kyushu Junior College of Kindai University)

要旨

本論は、主に博多でちんどん屋として活動をしている「ちんどん鈴乃家」を研究対象として、ちんどん文化の歴史と特徴を検証すると同時に、特に子どもへ与える影響を、参与観察とデプスインタビューの方法論を用い考察したものである。

キーワード：ちんどん，口上，子ども，日本文化，言語習得

Abstract

The subject of this research is "Chindon Suzunoya", which is mainly based in Hakata. The first half of the paper examines the history and characteristics of Chindon culture, focusing on the theme of "Kojo." In the second half of the paper, I examine the effects of Chindon, especially on children, through participant observation and in-depth interviews.

Keywords : Chindon, Kojo, children, Japanese culture, language acquisition

1. はじめに

2023 年以降、コロナの影響で一時停止していた社会の機能が再度動き始めた。教育現場には学生の往来が戻り、夜の街の明かりも照らされている。その中で、歩く宣伝媒体として日本社会を歩み、人と人との輪を作ってきたちんどんは、実演を公共空間で行ない大衆文化の一形態となっている。

本論では研究対象として、ちんどん自体、そしてその中でも特に博多を中心に活動している「ちんどん鈴乃家」を取り上げている。「笑顔をつなぐちんどん屋」をキャッチコピーとして 2006 年より活動しているちんどん鈴乃家は、メンバーが女性のみで構成されており、昭和レトロなファッションと鮮やかなメイクを施したポップレトロなスタイルを売

りにしている。後述するが、ちんどんは宣伝業という職種のひとつとして生業が始まった。依然として関東や関西ではその職人としての性格を色濃く残しているちんどん屋が多いが、鈴乃家はイベントでのパフォーマンス、「にぎやかし」の実演も活動の売りとしている。宣伝をすると同時に、ちんどん文化そのものを表象するアーティストとしての側面を持っている。現在、ちんどんという言葉は、特に若者世代はその名前自体を知らないことも多く、日本人が周知の芸能という認識では語るができない。その中で視覚的アプローチも重視している鈴乃家は若者や子どものファンも多く、鈴乃家を知ることでもちんどんを知る人々も出てきている。

ただし、参与観察を継続的に行なっているうちに、鈴乃家の実演の基礎が視覚的アプローチではな

いことを確認した。あくまで基礎となっているのは、元々ちんどん要素の基本である口上やリズムに込められた聴覚的アプローチである。聴覚的アプローチが土台として完成されて初めて、鈴乃家の視覚的アプローチも生きてくる。そしてそのパフォーマンスはまさに臨場感を伴った再現不可能なものとなる。

本論は、ちんどんの口上やリズムの特徴をちんどん鈴乃家の参与観察と鈴乃家女将新井理恵子氏へのデプスインタビューも取り入れ考察し、ちんどん文化への考察を深めると同時に、これからの子どもに対して、ちんどん文化が与える影響を検証し提示することを目的としている。

2. 背景

そもそも最近の傾向として、20代から30代の若者を中心に、物事を5・7・5・7・7の31音で表現する定型詩である短歌がブームになるなど、今一度日本語の持つ言葉の力と、その音への注目が集まっている。ポップな言葉で自ら歌を詠み、SNSに投稿する若者が増加している日本社会について、歌人・作家の東直子氏は、現在の短歌ブームとコロナ禍とを関連づけて次のように語っている。「新聞の投稿欄の選歌などを行っているのですが、特にコロナで自粛生活を強いられていた時期から投稿歌がぐっと増えたんです。やはりちょっと閉ざされた世界の中で自分の内面に心が向いていき、それを言葉にしたい、言葉を詠みたいというような人があらわれたのではないかなと感じています。」(1)

個人が抱く自己と向き合うことへの内省的な欲求が、これまでの人と人との肉体的なつながりが希薄になった生活様式の中で強まることは上記の東氏の発言が示すように当然のことであるが、その一方で、希薄なコミュニケーションしか得ることができなかったからこそ、社会的なつながりを求めてしまう集団意識の強い日本人としての本能があるのではないかと短歌ブームを推察することができる。まさに、日本人の個を重んじる側面、調和する側面、両方が短歌ブームの中に見てとることができる。その両面を深く考察するツールとして、日本語という言語を重視する風潮が訪れている。

日本では、昔々古くから5音と7音を使って表現

する方法が定着しており、多くの日本人は5音と7音で構成される文や話を「ゴロがいい」「耳なじみがいい」と感じる。

この表現方法は、七五調、五七調などと呼ばれるものである。短歌もそのひとつで、5音と7音の繰り返しで、特定の情景や物語を風景として読者に想像させる。この風景を読者が自分の中で具体化するために、短歌は「読む」ではなく「詠む」行為に重点を置く。短歌は「文字数」ではなく読み上げたときの音の長さである「音数」で数える。短歌において言葉の内容も重要であるが、音のリズム・拍子も極めて重要である。そして、この七五調の言葉とリズムを重視する特徴が、ちんどんの口上に転用されている。よって、現在ちんどん文化を考察することは現在の日本文化の理解と深くつながっている。

3. ちんどんの口上と拍、その歴史

ここで、上に記した「口上」について説明を加えたい。ちんどんにおける口上は、関東地域でちんどん屋を実践しながらライフヒストリー研究を報告した大場ひろみ氏らから次のように定義づけられている。「お店の宣伝や人寄せをする売り文句。あるいはイベント等で、面白おかしい話をして楽しませる話術。七五調のリズムに乗せたり、歌舞伎や香具師の口上を織りまぜる人もいる。」(2) また、現在の日本において最大規模のちんどん業を営むちんどん通信社の社長である林幸治郎氏によると、「昔は演奏しながら街を歩き、四辻などで演奏を止めて、おもむろに「東西～東西～」って声を発したもんだった。」(3) ということだ。元々は定型的な表現がちんどんの歴史上にはあり、この口上は路上で聞こえた際に「私たちはちんどん屋です」と表象する一種の記号でもあったことが分かる。

例えば、日本の伝統文化のひとつである歌舞伎の世界では、幕間に、「東西～東西～」という口上がある。歌舞伎の口上は、劇場は通常は南に向かって建てられており、「東西」は客席の端から端まで全ての客に対する呼びかけをあらわすため、もしくは大阪道頓堀の芝居小屋が東西の通りに面しており、お客の呼び込みにこの言葉が使われたため、という2例が代表的な所以となっている。この意味からすると、「すべての人様に申し上げます」という意味

ちんどん文化と子ども

であろう。この文句をちんどんは、ちんどんの口上に援用した。劇場から飛びだした路上で「東西～東西～」と伝達手段のひとつとして商いを行ない始めた時期、ちんどんは口上重視の宣伝業を主としていた。

そもそもちんどんはどのように生まれたのか。実は「西洋にない日本独特の“肉体” 広告」(4)と表現される、ちんどんの形態が生まれた時期、「ちんどん」という名前はまだ使用されていなかった。ちんどん屋の元祖は、江戸時代の1845年に初めて登場したと言われている。大阪法善寺の飴売りであった飴勝が、竹製の鳴り物と売り声でお客を集めて飴を売り、人気者になった。この時に、商品である飴を売る売り声そのものを商品として売ることを考え、寄席の客寄せを請け負い、一枚下駄で拍子木をさげ町に出て宣伝をしたことで注目を浴びることとなった。これがちんどん屋の元祖といわれている。この時点では、ちんどんはもちろん他の何か特定の名前すらついていなかった。

その後、飴勝の仕事を引き継いだ勇亀が、芝居の口上をまねて「トザイトーザイ」と町中を触れ回った。この口上の7音から関西では東西屋と呼ばれるようになった。これが明治時代の1880年～81年頃で、路上広告業は関西において東西屋と呼ばれるようになった。東西屋の一員である秋田柳吉が初めて東京で、東西屋式の宣伝を行ったのは1885年である。秋田は日本で初めて和製映画の興行を手がけ自らの広告屋の屋号を広目屋と名付けた。そういう経緯で、関東における広告業は広目屋と呼ばれるようになった。秋田は1883年に鹿鳴館が落成し、陸海軍の軍楽隊が民間へ移る中で、東西屋の拍子と口上に、軍楽隊を基とした音楽隊を要素として加えた。楽隊広告が誕生し類似業者が増え、宣伝行列のことを関東において広目屋ともいうようになった。広辞苑によると、ちんどん屋とは、「人目につきやすい服装をし、太鼓・三味線・鉦・ラッパ・クラリネットなどを鳴らしながら、大道で広告・宣伝をする人」とある。この定義は口上という宣伝文句に音楽をプラスした広目屋に該当するものである。楽隊を伴った広目屋が低迷期に人件費節約のために、鉦と太鼓を1人で同時にこなせる「ちんどん太鼓」を生み出し、楽器に取り入れたことが、ちんどん屋の名前の

由来となっている。



ちんどん鈴乃家の女将、新井理恵子氏

(新井氏提供)

上の写真に注目すると、傘の下に鉦、鉦の下に太鼓がある。これが基本のちんどん太鼓である。広目屋のちんどん太鼓から発せられる音、すなわち、鉦の音の「ちん」と、太鼓の「どん」の音を聞いた東京の人が「ちんどん屋」と広目屋を呼んだことより名称が全国に広がり、現在の一般的な呼び方になったと言われている。

宣伝という言葉伝える術にこだわった職業に、ここまで音楽の力が備わった理由はなんだろうか。2022年より継続している参与観察の対象及びデプスインタビューのインフォーマントである新井理恵子氏は、昭和初期の映画メディアの音響技術の進化にその起因を挙げた。新井氏の話によると、昭和初期に映画がサイレントからトーキーに変わり、これまでサイレント映画の上映時に演奏をしていた楽士が仕事にあぶれ、転職した結果ちんどん屋に流れてきたことが、ちんどん屋の音楽性を高める

ちんどん文化と子ども

きっかけになった。熟練した楽士たちによって、当時日本で誰もが知っている音楽を伴って練り歩くことで、市井の人の注目を引きつけて、そこで七五調の口上を繰り返すスタイルは、まさに日本人の『ノリ』を巧みに操る広告戦術のひとつであった。

例えば現在ちんどん屋の定番曲と言われている『美しき天然』は佐世保の海兵団軍楽隊の田中穂積楽隊長が、佐世保に初めてできる女学校で女学生が戦時下においても安らかな気持ちで歌えることを目的として作った唱歌であり、日本初のワルツとしても認知されている七五調の楽曲だ。こちらが歌詞の一部引用である。

美しき天然
武島羽衣作詞、田中穂積作曲 1902年

空にさえずる / 鳥の声
峯より落つる / 滝の音
大波小波 / とうとうと
響き絶やせぬ / 海の音
聞けや人々 / 面白き
この天然の / 音楽を
調べ自在に / 弾きたもう
神の御手（おんて）の / 尊しや

次に、ちんどん鈴乃家の口上を引用する。

ちんどん鳴らして / やってきた
音はにぎやか / ちんどん娘
派手な衣装を / さらりと着こなし
玉の顔 / 柳腰
【太鼓の音：チンチンドン チンドン】
太鼓に口上 / 大道芸
あの手この手で / 楽しませるのは
ちんどん鈴乃家で / ございます

この口上を実際の音源で視聴してみると、七五調の言葉が一定間隔の拍で規則的に耳ざわりよく聴者に届くことが分かる。拍とは、音楽を聴いたときに、人間が心理的に感じ取る音楽の鼓動のことである。この拍は不規則な拍の場合は不安を、規則的な拍の場合は平安を人の心にもたらす。ちんどんの口

上は、規則的な拍の中でリズムカルに言葉をおさめ、七五調を基礎とした文句を織りなしている。

新井理恵子氏によると、ちんどんの口上は「宣伝文句であり例えば何かの商品を近所に宣伝し、その商品の購入を促進させるための言葉であったり、宣伝を開始するための、掛け声の合図のようなものも含まれるため、違う商品を違う地域で宣伝する以上、口上にはマニュアルはなく、すべてがオリジナルなものになる」ということであるが、それら独自性を持つ口上がちんどんたるものになる理由がまさに七五調の口上とリズムに他ならない。そしてそれは、言葉とリズムの融和性による子どもの言語習得へのプロセスと関連している。この段階に至って、ちんどん文化を子どもを対象として検証する可能性が出てきた。

4. ちんどんと子ども

実際にちんどん鈴乃家は子どもへのワークショップをする機会があり、その中で口上を子どもに伝授することがある。子どもの発信力というのは大きく、「いらっしやいませ」「よろしくおねがいます」といったような単純明快な文句で十分であるということである。シンプルな文句は、逆に様々なケースにおいて口にしようとする文を習得するきっかけを与え、状況に応じて言葉の意味に情報を付加していく。そして、そのシンプルな言葉に情報を付加するための不可欠な要素は、笑顔に代表される普遍的な身体表現と、誰でも知っているような曲の効果である。新井氏が「とにかく興味を持ってもらわないといけないから、（興行に）行った先のお客さんの層、年代に合わせる」と話すほど、ちんどん鈴乃家にとって音楽は欠かすことができない要素である。子どもは言葉を音で覚えるというが、まさにちんどんはその歴史の始まりに言葉＝情報を伝えることを生業としていた。ちんどん特有の口上、拍を基調とした七五調のリズムは、聴衆への内容理解を刺激するツールとすることができる。

換言すれば、言葉を覚えるという行為が、実は音楽的ツールを利用することでより効果的に展開できるのではないかと、ということである。以上の考察を深化するために、本論ではちんどん鈴乃家が行なうワークショップの参与観察と新井氏へのデプス

インタビューを基軸として事例研究を進めている。

前提として本論における「子ども」の定義を述べる。「就学前の子どもに関する教育、保育等の総合的な提供の推進に関する法律」(平成18年法律第77号(一部改正:平成30年6月27日法律第66号))第2条第1項によると、「この法律において「子ども」とは、小学校就学の始期に達するまでの者をいう。」と定義されており、この区分は一般的には乳幼児期にあたる。この中でさらに、幼稚園教育要領、保育所保育指針、及び幼保連携型認定こども園教育・保育要領を参照として3歳以上の子ども(幼児)を対象とした参与観察を行なっている。そもそも幼児を対象とした理由は、子どもの言語習得の過程にちんどんのアプローチを開始する有意性をこの時期として認めたからである。

幼稚園教育要領第2章「ねらい及び内容」の中、言葉の獲得に関する領域<言葉>の項において「自分の気持ちを言葉で表現する楽しさを味わう。」(1-(1))、「人の言葉や話などをよく聞き、自分の経験したことや考えたことを話し、伝え合う喜びを味わう。」(1-(2))、「日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、言葉に対する感覚を豊かにし、先生や友達と心を通わせる。」(1-(3))以上のねらいが幼稚園教育において育みたい資質・能力として定められている。それに対応した教育内容は、先生をはじめとした他人とのコミュニケーションの習得とともに、「生活の中で言葉の楽しさや美しさに気付く。」(2-(7))、「いろいろな体験を通じてイメージや言葉を豊かにする。」(2-(8))といった「気付く力」「体験型の言語習得」となっている。また、感性と表現に関する領域<表現>の項においては「音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう」(2-(6))、「かいたり、つくったりすることを楽しみ、遊びに使ったり、飾ったりなどする。」(2-(7))、「自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりするなどの楽しさを味わう。」(2-(8))とある。さらに留意点として「幼児の自己表現は素朴な形で行われることが多い」(3-(2)一部抜粋)との言及もあることから、単純な表現において言葉遊びや演じる遊びを楽しむことが幼児教育において有意義なことであり、これは拍に合わ

せたリズムカルな口上や楽士演奏、その場で出会う一期一会の人達とのコミュニケーションといった形で、ちんどんの実演でなされていることでもある。

以上を踏まえると、特に<言葉>と<表現>に注目した幼児教育に、ちんどん体験がアプローチする可能性が多分にある。

5. 事例

ここからは、実際の事例を考察していく。新井氏へのデプスインタビューによると、鈴乃家は2007年頃から2024年現在まで子ども向けのワークショップを計20回ほど行っている。始まりは子ども劇場が立ち上げた「子ども文化コミュニティ」でパフォーマーとして出ていた新井氏に、福岡市南区の高宮地区でのワークショップ企画が依頼されたことだった。最初のワークショップは①紙芝居でちんどんの歴史を知ってもらう②ミニショーでちんどんの実演を見てもらう③不織布などによる衣装づくりをする④自作の服を着て街を歩く。その際にはミュージカルの宣伝をすることで、ちんどんの宣伝業としての性質を生かす体験を行なう。以上4段階のプロセスで行われた。以下、写真はすべて新井氏からの提供による。



① 衣装を手作りしている場面

ちんどん文化と子ども



② 商店街の練り歩き

写真①②はその時の様子である。子どもが楽しそうに自らの身にまとう服を着て、これから自分たちが行うミュージカルの宣伝を笑顔で行ない大成功をおさめた。このワークショップ以来、毎年高宮商店街での練り歩きを鈴乃家は継続し、現在高宮という町に定着している。ただし初期のワークショップについて新井氏は、本来「体験」自体に意味がある体験型ワークショップなのに「形（モノ）」を重視する傾向があり、体験という意味そのものが軽視されていた問題点を指摘している。社会教育の一環として行われるワークショップは多分に記憶を形容するためのモノを重要視しているが、本来の体験とは生身のコミュニケーションであってこそという新井氏の信念を確認した。

現在の鈴乃家のワークショップは、開催時期は夏休みやクリスマスのイベント時期で、内容は ①ちんどん屋を知る ②ちんどん屋を見る ③楽器の練習、口上の練習、動きの練習をする ④本番を2時間前後で実施する という体験型ワークショップの基本にかえた内容で実施されている。実際に参与観察をした 2023 年 11 月の子ども向けワークショップの中では、突如と鳴り響く音楽と口上、そのリズムに合わせて S 字行列になってそぞろ歩きをするちんどん鈴乃家の傍を子どもたちが並走し、その後にメンバーがメイン会場で大道芸を行なうスケジュールで行なわれた。最初にインパクトのある「見世物」としてのパフォーマンスによって子どもの注意を引くところが印象的であった。

下の写真③が実際に福岡市内の小学校でにぎやかに登場した鈴乃家と子どもたちの写真である。



③子どもに話しかけるメンバー

小学校の校庭という場所の性質もあり児童も多く幼児のみの観察は難しかったが、幼児へのアプローチ法は ①バルーンアートを演奏とともに披露 ②その作品を複数の幼児に提供し作品を持って音楽に乗るように誘導 ③いつのまにか周囲に他の子どもたちも集まる ④演奏とともに踊る人の塊ができ盆踊りに展開されていく。以上のプロセスが展開された。



④ちんどんに見入る幼児



⑤ちらしを配る6歳

写真④⑤は2024年4月の天神新天町の興行である。子どもに限定したワークショップではなかったが、子どもの観客が多かったことに加え、最初から子どもがちんどん実演に加わっていたことは注視する点である。この時期以降鈴乃家が大人と子どもで興行をする、もしくは子どもに対してワークショップをする機会は多くなった。印象的だった点は、本番前に中学生のメンバーが年下のメンバーである子どもに繰り返し様々な声色で「いらっしゃいませ」「こんにちは」「どうぞ」「よろしくお祈いします」など素朴な挨拶の声出しをさせ、単調な振り付けを反復させている点であった。本番前と本番の切り替え時において、その子どもはオーディエンス（第3者）の介在により現場を解釈していた。そこですかさず大人の実演者が「今日は可愛い子がちんどんしていまーす」とサポートを入れ、観客を笑顔にし、その笑顔を見た実演者である子どもが笑顔になり、空間に一体感が生まれていった。その空間にはちんどんの響きを聴きつけてやってきた幼児がジッとちんどんを見つめている姿もあった。6歳になりたての実演者である幼児は、最終的には写真の

ように自らチラシを他者に配りはじめた。「どうぞ」「よろしくお祈いします」「ちんどん鈴乃家です」という言葉に対し、質問や「かわいいね」の言葉を返してもらい、笑顔で「ありがとう」と返していた。「笑顔をつなぐちんどん屋」がキャッチコピーの鈴乃家の到達点は、「人と場所」「思いと笑顔」をつなぐことである。

実演において、子どもは自ら他人の感情に気付き（気付く力）、現場において他人とコミュニケーションを取りながらコミュニケーション力を磨いていくのだ。（「体験型の言語習得」）

6. まとめ

ちんどん文化の研究者である阿部万里江氏は自著で次のようにちんどんが織りなすコミュニケーションを表現している。

「情動的な対人関係を生み出すことが、ちんどん屋の音楽による広告業の核心をなすのだ。

私は、聞き手の感情に気を配り想像する実践を「想像共感 imaginative empathy」と名付ける。」（5）

ちんどんが幼児の言語習得のきっかけになるかについて新井氏は可能性を見出している。下記にインタビューの一部を引用する。（6）

Q1: 「ちんどん」は子どもの言語習得のきっかけとなりえるでしょうか？

A1: 言語習得のきっかけとなりえます。ちんどん屋をするにあたって最低限必要な要素は、①人前に出て話す事ができる ②楽器の演奏ができる ③臨機応変に対応できると考えますので、その全体の動きの中でリズムを感じながら臨機応変に言葉を発していくという点では養われるかもしれません。

新井氏の言葉の中の「臨機応変」という箇所はまさに、阿部氏の「想像共感」に他ならない。次のインタビュー内容も援用する。

Q2: 子どもが口上を習得する際に、まず大事な要素はなんですか？

A2: ①ハッキリと大きな声が出せる（理由：人前

でしっかりと声を出せなければ伝わらない。)

②リズム感がある(理由:短時間で必要最低限の情報を伝える場面が多いので、人が耳を傾けたいくなるような軽快さが必要。)

ちんどんは言語習得の過程で音楽の拍を身体で身につけ、その成果を実演の場において成熟させる。子どもにちんどんの実演を通して「想像共感」を習得させることが、言語習得へのさらには人間形成の熟成を図ると考える。確信したのは、ちんどんのパフォーマンスによって、子どもの体験が複層的に立体化されるという実感である。日本の古典芸能との遭遇、音楽のリズムに刺激される能動的な身体運動、リズムに合わせて言葉を発する爽快感、他者との距離を近接化するコミュニケーションと、社会に関する意識の自然な体得などが、まさに、ちんどんによって子どもに提供されうるツールとして機能するという事ではないだろうか。

7. おわりに

今回は、ちんどん文化を考察するに至った背景と、ちんどんの歴史、そして実際に子どもに対して行われたちんどん鈴乃家のワークショップ及びイベントの参与観察と、それに関連するインタビューをもとに、ちんどん文化が子どもに与えるパフォーマンス効果を検証してきた。今後は、子どもの言語習得の展望をちんどんの参与観察の継続とワークショップの企画立案及びコーディネートを通して考察していきたい。

謝辞

今回の研究にご協力いただいた「ちんどん鈴乃家」女将の新井理恵子様をはじめ、鈴乃家メンバーと関係者の皆様に感謝申し上げます。

注

- (1) 参考 URL 「NHK クローズアップ現代」
<https://www.nhk.or.jp/gendai/articles/4762/>(last accessed 2024/09/24)
- (2) 大場ひろみ・矢田等
『チンドン 聞き書きちんどん屋物語』
バジリコ株式会社、2009、p. 47
- (3) 参考 URL 「ちんどん通信社」
<https://tozaiya.co.jp/diary/>(last accessed 2024/09/24)
- (4) 1989年12月号の『芸術新潮』では、チンドンはサンドウィッチマンと比較された。(p. 27)
- (5) 阿部万里江『ちんどん屋の響き——音が生み出す空間と社会的つながり』
世界思想社、2023、p. 128
- (6) 2024年5月9日実施分

文献, 参考 URL

- (1) デイヴィッド・H・シャピロ他
『カバの“ちんどんやさん”』清流出版、2009
- (2) 吉見俊哉・北田暁大編『路上のエスノグラフィ ちんどん屋からグラフィティまで』
せりか書房、2007
- (3) 秋山真志『続・職業外伝』ポプラ社、2006
- (4) 安達ひでや『笑う門にはチンドン屋』
石風社、2005
- (5) 菊乃家 丸他『チンドンひとすじ 70年』
岩波書店、2002
- (6) 堀江誠二『チンドン屋始末記』
PHP 研究所、1986
- (7) ちんどん鈴乃家 Official Homepage
<https://Suzuno-yarieko.wixsite.com/Chindon>
(last accessed 2024/09/24)